

第1回検討会における主な意見について

熊本県教育庁県立学校教育局高校教育課

第1回検討会での主な意見（総論）

※（ ）は発言者（敬称略）

- 子どもや保護者、そして教職員、地域という4つのステークホルダーが皆で協力をして、人口減少社会の中での高校教育のあり方をどのように考えていくか。（松下）
- 子どもが減るということは今の教育のやり方が不可能になるということ。高校卒業後に社会人になる生徒もいる中、Society 5.0の世界で生きていくための力をつけるために、県立高校はどうあるべきかといった本質的な議論をしなければならない。（松下、櫻井）
- 学校のことを学校だけで考えないことが大事であり、保護者だけでなく一般の方が学校は大事だと思ってもらえるような世の中になるのが大事なのではないか。（田中（尚））
- 地方創生というのは教育委員会の仕事ではないが、それをどのようにやっていくのか、県立高校に地方創生の役割を担わせていいものかどうか、この場で議論したい。（櫻井）
- 今回の提言をもとに県教育委員会が策定するプランを高校入試に反映させる時期はいつ頃か。（森）

第1回検討会での主な意見（魅力化 1/2）

- 魅力化の取組には自治体の協力が欠かせないのではないか。本気で高校の魅力化に取り組んでいるところは必ず自治体の協力があると感じている。一方で、あちこちで人員が不足しておりサポートが必要。（田中（尚））
- 総合的な探究の時間などで地域の協力を得ながら教育活動を行っており、生徒が地域の方々と接することで、その地域に対する思いを実感として持つような効果が見られている。また、地域の課題を考えるということは、高校生の思考力を高めたり、どうしたら自分たちが協力できるか、その解決に向けて何ができるのかを実際に考えたりするなど、大変良い学びの場になっている。（田中（篤））
- 地元の高校の情報が小中学校になかなか入りづらい。一方で、小中学校時代から地元の高校を知り、生徒との交流を深めることは重要。県立という線引きをせず地域ごとの情報共有をしていく場があれば良い。（吉良）
- 県立高校の情報が保護者になかなか入ってこない。また、マンガ学科などは分かりやすいが、普通科の学科改編は分かりにくいし、定員割れ等による過小評価でイメージが悪くなると、保護者も敬遠しがちになる。（山口）
- 学校の改革が学校の中だけで終わりがち。地域との繋がりも含めて情報発信し、皆で考え、共有をしていかなければいけない。（松下）

第1回検討会での主な意見（魅力化 2/2）

- 4年間の魅力化の取組について、いろんな取組をやった結果で、どういう成果が得られたのか。（竹下）
- 高校3年間で生徒の意識や行動がどう変化しているかを検証することも今後重要になる。高校3年間でどれだけ伸ばしているかが本当の教育力では。（岩本）
- 教育の充実をどういった指標で評価していくか。小規模校の課題に対して、定員を考えたり、情報技術を活用したりしながら教育環境を整え、人材育成をさらに強化しながら、地域と連携していくのがいいのではないか。標準法がある中では投資も必要では。（竹下）
- 大学進学を目指して熊本市内の高校を志望する生徒が多い中、そこを魅力として明確に示していけるかが重要では。地域の高校でも生徒が育つ、地域の方にとっての魅力にも繋がっているということを、何らかの形で評価し「見える化」していけば、1つの最大の魅力になるのでは。（松下）
- スクール・ミッションを定義するだけでなく、今度はそれを評価していくことも必要なのでは。（松下）
- 子どもたちは先生を良く見ているので、先生が働きがいをもって生き生きと働くことが大事。先生も地域の人達もこの高校があって良かったと思える評価の方法を継続的に考えていかなければいけない。地域意見交換会も1回やって終わりではなく、学校運営協議会などと連携して続けていくことがサステナブルな学校評価になるのでは。（田中（尚））

第1回検討会での主な意見（学校配置等 1/2）

- 「将来を見据えた学校規模・学校配置の考え方」というところには、「地域における高校のあり方」という思いが必要なのでは。（田中（尚））
- 少子化の現状をものすごくシビアに見なければならぬ。かなりのボリュームで定員割れが出ているが、それぞれの（旧）学区で事情が異なるため、物理的に通える高校がなくなってしまうところとそうでないところなど、（旧）学区ごとに丁寧に見ていく必要があるのでは。（森）
- シビアな現実と目標との折り合いをどうつけていくのかが、これからの議論になっていくのでは。その中で地方創生と教育の充実を並べて掲げるというのは、すごくチャレンジングなこと。前回の高校再編で地域に軋轢を生んだという経験している中、地方創生との両立を図るのだというメッセージをしっかりと打ち出したことはとても良いことでは。（森）
- （前回の再編を経験して）本当に高校は地域になくってはならないと思っているが、ただ叙情的な話や母校をなくすな、といった話ではいけない。熊本地震の際に皆学校に避難し、避難所に指定されていない学校も先生方はちゃんと対応された。そういった生活安全保障の考え方を入れると、学校の存在理由が変わり、なくてはならない存在ということになっていくのでは。そこまで広げていくのかを議論したい。（櫻井）

第1回検討会での主な意見（学校配置等 2/2）

- 熊本市内、市外の格差を解決するためのビジョンを示せば、全国に普及するような提言になるかもしれない。（松下）
- 安易に学校再編をするのではなく、例えば高森高校のマンガ学科設置時など、地元自治体とどのように協議をしながら取り組まれたのかを示してもらえれば、何か方策が見つかるのでは。（末松）
- 今は40人1クラスだが、（35人1クラスなど）少人数にして教員をきちんと配置すれば、小規模校で開設できない教科が出てくるといった状況を改善できる部分もある。ただし、それには投資が必要。（竹下）
- 通学区域に関して、宇上地区で10%ほど流出が増加したということだったが、保護者は、子どもに何とか多くの選択肢を持たせたいと思うので、保護者としては子どもの選択肢が増えるというのは、非常にありがたいことだと思っている。（村上）
- そこに住む人たちが増えないことには、熊本市内から市外に通うというのは難しいのでは。人口が集中しないような施策をとっていただき均等になっていけば、高校教育、入学者数に少しは影響してくるのでは。（村上）
- 教育の機会均等というのは皆が持つ権利であり、中央（都市部）だけで保障されていればいいのかという問題がある。（松下）

第1回検討会での主な意見（データ関係）

- 今後の議論や地域意見交換会に向けて次のような客観的なデータや情報があると議論が進みやすい。（岩本）

【入学（入口）に関するデータ】

- ・中学校卒業後の熊本市外⇄熊本市内への入学状況の推移
- ・公立、私立、通信制等進学割合の推移
- ・熊本市外の高校における地元中学校からの進学率の推移
※地元には1つしかない高校の場合、定員充足率よりも地元からの進学率が重要
- ・熊本市内の進学校の入試の点数の推移（生徒層の変化）

【卒業後（出口）に関するデータ】

- ・高校卒業後の県内・県外への進学割合又は就職割合
- ・25歳時点でどのくらい人口が増減しているか
- ・大学入試について、年内入試と年外入試の割合の推移

【その他のデータ】

- ・地域連携に関して、県立高校に対する各市町村側の予算措置状況

- 地域意見交換会を実施するうえでも数値を示しながら説明していかなければならない。（松下）